

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
小田さき枝	女 性	20 歳	豊橋市 (東栄町本郷)

「死んだ子を3日も抱いて」

「東三河郷開拓団からの手紙」より
(部分修正)

終戦のとき私は20歳^{さい}、2歳の女の子と生後8ヶ月の二人の娘^{むすめ}がいました。主人は30歳でした。

チチハルの収容所^{しゅうようじょ}にいたとき、主人が高い熱病にかかり、氷を買いに売っている店を探しながら1日ばかりで歩き回りました。言葉が通じないので本当に困りました。やっと見つけて帰った時は、氷は買った時の四分の一ぐらいに溶けてしまい、泣きながら主人の頭を冷やしたことが忘れられません。その後2歳の子どもは発疹チフスで死亡し、主人は死んだ我が子を背負って遠く離れた平野まで私と下の子を連れて行きました。子どもを埋める穴を掘り、背中から死んだ我が子を静かに降ろして穴に入れました。みんな泣きながら別れました。

その1ヶ月後には主人が発疹チフスにかかって亡くなりました。友人たちの手で、我が子と同じ場所に埋めていただきました。ありがたかったです。

残った私と幼子は、別の収容所に移され、大きな公堂のような所で200人ぐらい一緒に寝起きしていました。

その頃は、私も子どももとても体が弱っていました。朝目を覚ましたとき、手枕していた我が子が冷たくなっていました。やせ細った私には我が子が死亡したことを告げに行く元気もなく、見回りに来る人を待つほかなかったのです。やっこのことで伝えることができたのですが、1日に10人ぐらいは死んでいくので係の人も忙しく、私は3日間死んだ我が子と共に寝ていました。

目、鼻、口にハエが卵^{たまご}を産み、ウジ虫が出てくる頃、やっと順番が来て、ムシロにくるくる巻かれていく我が子を腰が抜けたような体で見送るのは、とてもつらかったです。

平成2年10月30日

(記録者 山本 恵さん)



奉天収容所の子供 飯山達雄「引揚げの慟哭」より